

Banker's Overconfidence and Irrational Lending Behavior

中央大学大学院 北村 仁代

本稿では、Daniel, Hirshleifer, and Subrahmanyam(1998)を基に、行動ファイナンスのアイデアを応用して、銀行の貸出行動を記述する理論モデルを提示した。このモデルは、「ノイズを含む不完全情報下での非合理的期待モデル」と表すことができる。

銀行は、実体経済の需給に応じて、合理的に貸出を行っているのだろうか。仮にそのように行われているのであれば、何故、「バブル」、「貸し渋り」、「黒字倒産」などの問題が指摘されるのだろうか。この問題を検討するために、銀行家は自信過剰であり、合理的ではなく、非合理的な期待形成を行うと仮定するアプローチを試みた。

本稿で採用した理論と、合理的期待仮説の前提の違いは、情報の取り入れ方にある。合理的期待仮説では、いかなる種類の情報も適切に評価され、同じ重みで取り入れられるが、本稿のモデルでは、自ら生産した情報の正確さが過大評価され、またより大きい比重で取り入れられる。結果、非合理的な貸出行動に繋がる。

既存研究の応用に際して、本稿で新しく加えられたのは、情報更新の仕方である。既存研究では、自己の情報の確かさを判断するのに、情報の取りうる値は(+1, -1の) 離散的な値であったのに対して、本稿では連続的な値を取り得る方法を提示した。また情報の更新に際して、情報そのものの比較ではなく、自己の予測値が新しい情報の中にどれだけ見出せるかで、自らの情報と予測の確かさを判断するという基準を採用した。

このモデルから得られた主な結果は、(1) 銀行家が自らの情報の正確さを過大評価すると、その情報の比重は、公的情報より大きくなる。(2) そして同じく不完全情報でもファンダメンタルに基づいて合理的に貸出を行う場合よりも、過剰（または過小）な貸出がなされる。(3) 将来のリスクの変動に伴う貸出行動は、より大きく変動するという結論を導いた。

これらの結果が示すことは、銀行家の自らの能力や情報の過大、過小評価が非合理的な貸出行動に繋がり、結果、バブルの発生、崩壊、それに伴う貸し渋りや黒字倒産という現象の原因となりうるということである。